

キラリテイの起源と生活世界における右と左の方向の意味

——「カントの問題」のために

小 川 侃

私の身と言うのは、ほとんど私自身と区別できません。私の身から出る、右の方向と左の方向とを、私はいわば直感的に区別しています。私の右の方向と左の方向とは異なっているということを私はよく理解し、自覚しているのです。この異なりをどのようにして明らかに出来るのでしょうか。それを本日は試みて見ましょう。

左と右との意味の差異の問題は、今日でも困難な、しかし、重要な問題です。これは、人間の身が一種の物体としておかれている空間において右と左の方向がどのようにに区別されるのかという問題でもあるのです。この問題の解決を最初に試みたのは、ドイツの哲学者の Immanuel Kant です。それ以来、この問題は「カントの問題」という固有名詞を与えられています。そしてぬきこんでた哲学者の間で意識され、問題とされ、解決が試みられています。たとえば Bergson, Wittgen-

stein 等が、各々の独自のモチーフからこの問題を取り扱い、また Heidegger の場合のように重要性を指摘するにとどめただけであります(1)

もとより、この問題に気づく哲学者はすでにかなり己の身体に鋭敏な感受性を持っている人だということが出来ます。重要な哲学者でもフッサールのように、この問題には表面的に触れただけの人もいます。私たちは実際直観的に私の左の方向と右の方向を鋭敏に区別しているのですが、この区別はなかなか明瞭に客観化できないのです。私はもつとも重要なのは、ベルクソンの分析だと思っています。ベルクソンは、明瞭に私たちが自然な感じで己の右と左とを区別しており、まさにその故に右と左とを客観的に定義しようと試みると、失敗するのだといっています。要するに、動物が生きている世界とその空間は、つねに質の差異を内在しており、のつぺらば

うな、ニュアンスを持たない空間ではないと考えております。それは、生きられた延び広がりの空間なのです。この生きられた延び広がり、客観学者が考え想定するユークリッド空間ではないのは、言うまでもないことです。

私には、これは、かなり事態の正鵠をついていると思われます。私が二〇一四年の三月三十一日に甲府の山梨大学の研究会で講演したとき指摘したように、カントのあとにルイ・パストゥールが酒石酸の結晶の左旋回と右旋回の区別をしております、そのときにこの問題は大きな役割を果たします。結論だけを述べますと、ルイ・パストゥールは明瞭に自己の身体が己以外の広がりに対して持つ位置を「遠近法の原点」として意識しておりました。一つには彼は絵を描き写生を得意としていたことにもよると思われます。観察者としての自分、観察者としての身体は、目の前に〈遠近法の開け〉を持ち、己がこの開けに対して原点＝零点として機能するということを意識しています。この原点に対して酒石酸塩類の結晶が右方向か左方向かに傾いて現われることを発見したのです。これは世紀の大発見でした。イギリスの有名なケルヴィン卿はこの事実にもとづいて「手」を意味するギリシア語の *cheir* (*χείρ*) から *Chirality* となづけました。彼は偶然にこの言葉を採用したのではなく、一定の理由があったのです。この大発見の底にあるのは、この左と右の方向の区別の意識にあるのです。彼はまた右と左の方向の区別を基にして、己が世界と空間に面前しており、同時に、自己の方法と態度をよく意

識し且つ自覚していたのです。この問題は、ひとりの哲学者が凡庸であるかどうかを試す試金石のようなものと思います。ハイデッガーの弟子筋の人で *Otto Friedrich Bollnow* という人がいます。この哲学者は教育哲学では非常に高く評価されているのですが、しかし、私に言わせると非常に高く評価されてはいるのですが、彼がその著作『人と空間』(2)のなかで、ドイツで哲学者がよくおこなうことですが、アリストテレス以来の空間の問題史を回顧したときに、彼がおこなった解釈学的分析は「私の身体」の存在論的な優位を見失っています。そのために私に言わせるとこの書物はいま我々が問題としている左右の方向の差別の点では、まったく価値がないのです(3)。彼は「左と右が原理的に同等の資格のもの」であるとみています。彼に言わせると左と右の価値の相違は人間に独自のものです。つまり右が *Gerade* (まっすぐな、とか正しい) を意味すること、左が *Krumm* (曲がった) を意味し、*Schiefen* (斜めの、歪んだ) を意味すること、この両者から意味の価値の差異が生じたのであって、このことから始めて、両者に価値のアクセントが付けられることになるというのです。したがって、ボルノウによると、右側は幸いを、左側は不幸をもたらすこととなります。「このランクの秩序づけは自然＝性質によって指示されているのではない」(4)とボルノウは断言しています。

ボルノウの見方は平凡です。身体性を十分に顧慮し、右と左の意味の起源に向かう探求的精神を欠いています。彼は、きわめて安易に伝統のうちの沈殿物に依拠しているのです。

私のボルノウへの問いは次のようになります。なぜボルノウがというような右と左の意味の差異に私たちは気づいたのでしょうか。なぜ右と左の意味の差異を洞察したのでしょうか。いったいどうして私たちは、右と左の方向の意味をたとえば右を「まっすぐな」、「正しい」という意味、また、左を「曲がった」という意味で理解しているのでしょうか。しかもこれは文化に制約されています。ドイツ語の特有の左右の差異の意識なのです。日本では、左大臣のほうが右大臣よりも上位にあります。

私の見るところでは、ボルノウは左と右についての浅薄な解釈と理解をしています。われわれの各自が、右と左を何らかの意味で区別し、その意味を区別しているがために〈Gerade（まっすぐな、とか正しい）とKrumm（曲がった）とを右と左に帰すること〉も理解できたのでしょうか。そもそも上官が「頭右」と命令するたびに兵士が右を向くことができるのは、ボルノウが暗に前提したような、のっぺらぼうな空間においてではないことは明らかであります。むしろボルノウとは反対に、もつと根源のところから、〈なぜ人は右を正とか直と、左を斜めとか歪みと理解したのか〉と問うほうがよいでしょう。この問いの答えはたとえばGardnerが試みています⁽⁵⁾。

しかしわれわれの考察は、さらに根源に向かうのです。上の問いのうちに前提されている次の問いに向かっていきます。

(1) いったい左と右とを客観的に定義することができるとはどういうか。

(2) (a) 左と右の区別は主観的に与えられたものといえ、空間はそれ自体でみるとのっぺらぼう（いいかえると均質的）なものなのでしょうか。

(b) あるいは左右の区別はすでに空間の内に形式的構造として内在しており、そのゆえに空間は何らかの仕方で左右の方向の分節化を受けているのでしょうか。もちろんここで空間といわれるのは、幾何学的な空間ではなく「生きられている伸び広がり」(l'étendu vécu) ⁽⁶⁾ というように、ベルクソンが考えていたものに由来しています。（今日の言葉で言えば、生活世界の空間に相当します。）

ここで私はこの問題に最初に取り組み、且つすでに原理的に説明していた哲学者カントの問題設定を取り上げましょう。1. Kantの問題。カントは主著『純粹理性批判』を書く以前に「空間における方位付けの最初の根拠について」⁽⁷⁾と、さらに一七八六年には「純粹理性批判」を踏まえて「思考において自己を方向付けるといふことは何を意味するのか」⁽⁸⁾という論文を書いています。

2. カントの本来の意図はLeibnizの空間論を批判することにあります。カントによれば、ライプニッツは、「空間とはその諸部分相互の間の関係だ」と考えていたのですが、これはカントにいわすれば不可能なのです。右手とその鏡像（おおむね左手に相当する）とは3次元空間ではまったく同じ空虚（空隙）を占めることはできない

のです。それにもかかわらず右手についてなされたその諸部分の關係の記述は左手にそのままではまりません。言い換えると、右とか左とかいった方向の区別は物の固有性 (Eigenschaft) ではなく——なぜなら右手と左手とはまったく同じ幾何学的な特性の記述をもつのですが、合同となることはできないからです——却ってカントはこの方向の区別がそこにおいて成立する絶対的な空間を想定する権利があると考えたのです。右手と左手とが「合同とならないペア、一対 (inkongruentes Gegenstück)」(9)であることが理解できるのはおのの絶対空間を考へることによつてです。右手と左手との存在こそ絶対空間の実在性の根拠なのだとかントは考えたわけです。しかし右手の意味を絶対空間との關係で考へるとすると、絶対空間は大きな右手の形を持つというグロテスクな考へになりかねないでしょう。身体を持たない精神 (たとえば天使) が切り落とされた人間の片手を右手か左手かを判定すると言ふ場合を想定してみましよう。そのときにはそのように絶対空間を呼び出して考へるより他はないのです。

ところがカントは後になつて「純粹理性の批判」の成果を踏まえて「プロレゴメナ」の十三節で、右手と左手との關係を「概念によつて理解させること」を諦めてしまひます。彼はいいます。「この關係は直接に直観に関わるのだ」(10)とし、空間を感性の形式とするにいたるのです。またカントは、空

間のうちに自分の位置を定位できるのは右と左の感情の相違によるのだと考へたのです(11)。結局、カントの考へでは、感情、気分、あるいは雰囲気などという身に直接結びついてゐるものと呼ばび込まないとこの問題は解決できないということになるのです。

方向定位するというのは、ドイツ語では Sich-Orientieren といわれるのですが、もともとは「太陽の昇る点を見出す」ということです。つまりカントの説明によると東の方向、オリエンツの方向を己が見出すようにするということです。しかし、それでも右と左との感情の差異が与えられていなければ南北を区別できないでしょう。

このことを説明するためにカントは次のような思考実験をしています。その思考実験とは次のようなことです。たとえばなにか奇跡が起こつてひそかに星座の位置が東西逆になる場合を考へて見ましよう。そうすると、私は北極星を見定めていたとしても、東と西の方向の区別を設定することができないでしょう。

もうひとつ別の場合は、私の知らない間に誰か他の人が家具をひそかにもとの位置から、鏡像の位置に置き変へたとしてましよう。すると、その室内では光が入らぬ限り私は自分を空間のなかに定位できないことになつてしまひます。そこで、カントは、左と右の感情の差異を引き合いに出します。カントが感情を引き合いに出すのは、つねに己が身体とともにあるということを意識していた証拠だと私はおもひます。「もとより自然に備わつていて、しかも何度も使用することに

よって身についた右手と左手との感情による差別能力が彼の味方となるのだ」ということになります。(12)このようにして、右と左の感情の差異が味方となって北極星を見ただけで変化に気づきその変化に基づいて己を空間の中で定位することができるでしょう。

カントの一七六八年の論文を検討したイギリスの分析哲学者の Remnant は、カントの考えを5か条にまとめあげましたが、その彼も結局、カントに対して次の3点を強調しているだけです(13)。

第一に、問題となっている対象に面しそれを吟味している誰か(その身体をも含めて)によって左右の記述はなされません(14)。

第二に人間の身体の二つの側面は十分に気づかれた感情によって区別され、この区別を外界に投入することによって空間の異なった領域を区別することができます(15)。

第三に私たちは左右の区別の外的事物及び私の身体への適用を学び取ることができます。左手と右手の外見的な区別と身体の感情における相違を結合するのを学び取るというわけですよ(16)。

以上のレムナント氏のささやかな分析は、身体をあまりに知性化し、経験的学習を重視しすぎたとはいえ、おおむね承認することができましよう。しかし私には、この再分析をさらに大きい「地平」において吟味し意味を読み取ることが必要であらうと思われます。

Wittgenstein は、『論理哲学論考』(Ⅰ)のなかでカントの問

題に触れています。左手の手袋も裏返せば右手に使えるのだから4次元の空間では「カントの問題」は解けるのだといっています。これは一種の機知以上のものではありません。レムナント氏もそう考えるように、第一に手袋自身が3次元空間の対象のうちではかなり異質なものです。重要なのは、あくまでも右手と左手という身体の分枝なのです。第二に3次元の物体を4次元にもつてきて解くような解は期待以上のものではありません。それでも一歩譲って Wittgenstein の解が正しいとしても彼が解いたのは「3次元空間では左手と右手のようにお互いが非合同のものも、4次元空間では合同になりうるだろう」という希望をのべたということです。ここでも右と左の方向の「意味」はまったくあきらかになっていません。

左の方向の意味はどうなっているのでしょうか。右の方向の意味はなにでしょうか。左と右の意味の客観的確定が求められています。この問いはさしあたって両者の客観的な定義を求めることになります。まず左右の定義の手がかりを内臓器官の位置に求めることはできません。なぜなら事実問題としてすべての結合双生児(いわゆる「シヤム双生児」)の一方、もしくは、および少なからぬひとびとは普通の身体の鏡像を内臓としてもつ場合があります。つまり心臓を右に肝臓を左に持つ人が現実にいるというわけです(18)。第二に権利問題として身体には二つの意味があります。身体の二つの意味とは、〈res extensa〉としての身体、つまり生理学者や医者が対

象として取り扱う身体Ⅱ物体」と、〈知覚器官としての私がそのつど生きている身体Ⅲです。身体にはこのように二つの意味があり、これら身体の両義性を無視してはならないでしょう。左と右の方向の意味は明らかに第二の知覚器官としての身体に関わります。内臓のほうは第一の身体Ⅱ物体に帰属しているのです。(19)

さて、私が生きている身体の内的感情(内感)にだけ左右の意味の相違の起源をみるのは正しくないでしょう。私の身体は周囲の世界に取り囲まれています。周囲の世界、環境世界を捨てた私の身体、いいかえると、環境世界とは切り離された私の身体そのものは考えることができません。環境世界を捨てたとき私の身体もまた無となつているでしょう。

だからレムナントの主張が語っていたような「身体の内部の左右の内感を、外界に投入すること」は外界から隔絶された身体という考えを含んでいて、事態に即していません。私の身体は感情と共につねにすでに何らかの仕方外部の世界に流れでて、溢れているのです。

それだけではなくなぜ投入論が主張されるのかを検討したいといけません。このような「投入論」が成り立つのはいったいどのようにしてなのでしょいか。この投入論は、感情が私の特別な圏域をつくり、外界や外部の世界から隔絶されている内面の世界であるという思想を含意しています。内面の世界は、いわば主観の世界、自我の世界を含みこんでいます。それは、主観・客観の二元性を前提している考えなのです。むしろ、ヘルマン・シュミッツがいうように、このような主

観の内面を外界へと投入するという議論は、成り立たないと私は考えています。むしろ、私たちの内面の世界は、そのつどすでに世界の方に流れ出しているのです。だからこそ雰囲気、気分というのは、私の内面の世界に閉じ込められているのではなく、つねにすでに私の身体を取り囲む世界の方に溢れているのです。

他方、レムナント氏は内感と外的事物とが相違し、且つ両者が結合することを学習するようにいわばうながしているわけで、人間が経験をつうじて学習すること、経験を通じて成果を挙げるプラグマティズムを示しているのです。これは、本来のカントの考えと合致するのでしょうか。

むしろカントが暗黙に主張していたことを捉えなおしてみましよう。「左と右との差異という主観的感情」を考えたとき、カントはどうして身体性と生きられる空間というものに気づかなかつたのでしょうか。フッサールはいいいます。「身体は方向定位の点の担い手つまりゼロ点になる。此処と今との担い手となる。・・・方向定位の中心としての身体を明示するのは別としても、感覚がもつ構成的役割によって身体は空間世界の設立の基点という意味を受け取る。」(20)

私たちが生きている世界、私たちが生活している世界は、生活世界といわれます。それは、科学による客観化の以前の世界です。この生活世界がもつ形式的構造を顕在化することは、とりわけ身体性とその周囲空間を主題化することに他なりません。この場合に左と右との方向の差異を顕在化することとは決定的な意味を持つとおもわれます。なぜなら左と右以

外の方向の区別は客観的に与えられているからです。それというのも、人間の身体を中心として重力によって上下の区別は客観的に与えられますし、前後の区別は、人間の身体の前か頭の後ろかという仕方でも客観的に与えられているといつてよいのですから。あくまでも問題は左と右の方向の差異と意味です。

このことはハイデッガーが師のフッサール以上に鋭く暗示的にではあるが気づいています。ハイデッガーは次のように言っています。ハイデッガーは、道具を手につくという状況を考えています。もともと彼の術語では、道具は手元存在といわれます。手は人間にとつて最も重要なものののです。私はハンマーを使って釘を打つときには、利き腕、通常右手をつかいます。(ちなみに、ハイデッガーは、世界のなかの存在者を基本的には三種に分けています。人間は現存在といえます。人間にとつて最も重要なものは手元存在つまり人間の手元にある道具です。そのつぎに、人間の目の前にある存在眼前存在があります。)

「左と右とは、主観が感じているある主観的なものではなくして、そのつどすでに人間の手元に開かれてある世界、すなわち手元にあるものからなる周りの世界の内へと方向づけられていることに属する諸方向なのである。」⁽²¹⁾

このようにハイデッガーは、左の方向も右の方向もすでに人間の手のあり方とともに世界のうちに属していると見ておられます。言い換えれば、感情を主観という密室に閉じ込めることは誤りなのです。言い換えれば、感情はそのつどすでに

周りの世界にあふれ出ています。これをもっとも厳密に且つ正確にのべたのは、ハイデッガーの現象学をつねに補完しながら己の現象学、「新しい現象学」を形成しているヘルマン・シュミッツです。彼は、今述べたことを人間がホメロスの『オデュッセイア』以来犯している過ちとしての「投入論」と指摘しています。つまり、人間が感情を、胸か脳か意識かとにかく身体はどこかに閉じ込めておいてそれを外部の世界に投入するのは、誤っているということです。ハイデッガーはヘルマン・シュミッツ以前にすでに原則として同じ事を指摘しているわけです。

カントは先駆的に多くのことを明らかにしたのですがひとつだけ誤りがみられます。それは、感性つまり感覚や知覚、感情に受動性しかみとめなかったことです。⁽²²⁾理由はあきらかです。カントの認識論では身体性が欠落しているからです。私が家を見るととき私は大地の上に立ち、目や頭を家に向け、同時に身体を一定の態度に保っております。またおなじひとつの家をさまざまな視点から眺めるほかはなくそのためには身体全体を家のまわりで動かす必要があります。⁽²³⁾

したがって感性の受動性には同時に能動性が含まれているはずなのです。ルイ・パストゥールが写生を得意としたのは、十分に理解できます。私の身体は絶対的な此処です。身体は諸感覚の寄木細工ではなく、ひとつの体系であり、周りの世界のうちに、周囲の空間やその諸方位との関係を含みこんでいるのです。私が身体のキネステーズつまり運動機能を自由に変更することによって、たとえば歩き回ることによって其

処を此処（身体）にするときに其処と身体とが属する *Orientierung* はさまざまに変様するのです。このとき知覚し働いている身体性との志向関係によって空間が私の第一次的圏域において構成されるのです。⁽²⁴⁾ フツサルを引用します。「私は知覚の働きにおいてあらゆる自然を、したがって自然のうちに含まれている私自身の身体をも経験する」⁽²⁵⁾

いずれにせよ右とか左とか言う方向は、身体と言う絶対的此処への方位付け（*Orientierung*）に属しております。（ちなみに方向のフランス語である *sens* は「方向」と「意味」の二つの意味を持ちます。）この方位付け（*Orientierung*）は生活世界のアプリオリな構造であって、決して恣意的なものではありません。フツサル自身は、「右という方向は私の身体の右側あるいは右手を指示する」⁽²⁶⁾ というのみであり、右と左の問題にそれほど敏感ではなかったように思われます。その意味ではハイデッガーのほうがフツサルよりもよほど鋭敏です。

したがって結局、右の「意味」は私の身体によって生きられ、演ぜられているのです。右の意味も左の意味も私の自由なキネステーズによって、私の為し得る（*Ich-kann*）によって、他方で、身体性も左右の方向も空間的自然とともに環境世界のうちに意味充実されております。つまり構成されております。この「私ができる」こそ、実存のたえざる自己超越の運動の始まりなのです。

私の結論を不十分ながら述べておきましょう。まず右と左とを客観的に定義することはできないでしょう⁽²⁷⁾。これは

ガードナーも承認するでしょう⁽²⁸⁾。しかしこのことは私にとって否定的な結論ではありません。つまり右と左を客観的に定義できないということは意味の客観的確定が不可能であることを意味しています。これは、実は、われわれの各自の実存の身体性への帰り行きをうながしております。つまり、生きられ、演ぜられる意味が残っているのです。私は一定の身体的な態度をとりながら世界へと自己超越しているわけです。この運動には左右の方向の定位を遂行する身体の空間化が参与しております。メルロー・ポンティは知覚の際にはまず子供が身体図式を形成し、態勢を整えることが必要だといっていました。もし私たちが左右の方向の差異を失えば（それはとりもおさず（私はできる）の圏域を失うことです）私たちはいかなる意味でも実存することはなくミンコフスキーのいう「生きられる距離という自由な空間」⁽²⁹⁾ を失ってしまいます。実存喪失とはまた世界の喪失であることは彼の解明したことです。生きられる距離と自由な空間とは、私の見るところでは、まさしく私の（身）と重なり合うものなのです。

もうひとつ重要な結論は、右と左の感情を含めて感情はすでに私の周りの世界に溢れているということです。だからこそ、私たちは、この部屋はよい雰囲気だね、とか、あるいは、今日の新幹線のなかでは周りの人々が明るくよい気分だったなどということが可能です。私たちの感情はつねにすでに周りの世界にあふれ出ているということです。だからこそ、レムナントのいう感情の投入論はそもそも不可能なことなので

す。それは、感情を主観の狭い圏域に閉じ込めたうえでそれを外部の世界に投げ入れるということに他ならないからです。

註。ガードナーの書物は左右の意味を物理学的化学的の層において探求しても無駄なことを示している。これから私は私の身体とそれが投錨されて生きられている広がりへの還帰の必要性をみる。ヘルクソンが最も鋭く第一の主著においてこの方向をしめしている。とはいえ彼はその方向を最後までたどることはしなかった。

なお、本稿は広島大学キラル自然哲学会（理学部井上克也教授主催）での発表に一部手を加えたものである。

【註】

- (1) Martin Heidegger: *Sein und Zeit*, S. 108 ff.
- (2) Otto Friedrich Bollnow, *Mensch und Raum*
- (3) *Op.cit.* S. 54-55.
- (4) A. a. O.
- (5) Gardener 『自然界における左と右』邦訳 p.106-107.
- (6) Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, S.72, *Matière et Mémoire*, S. 276 ff., Edmund Husserl, *Husserliana* Bd.VI, S. 49, Ulrich Claesges, *Husserls Theorie der Raumkonstitution*, S. 45-48.
- (7) Von dem ersten Grunde des Unterschiedes der Gegenden im Raume, 1768.
- (8) Was heisst: Sich im Denken orientieren?
- (9) Kant, *Insel-Ausgabe*, Bd. II, S.998.

- (10) Kant, *Prolegomena*, Bd. V, S. 149, *Akademie-Ausgabe*, Bd. IV, S. 286.
- (11) Kant, *Bd. V*, S. 269.
- (12) *Bd. V*, S. 269, *Akademie-Textausgabe*, VIII, 135.
- (13) Remant, *Incongruent Counterparts and Absolute Space*, *Mind*, Vol. 72, 1963, S.396.
- (14) *Op.cit.*, 394.
- (15) *Op.cit.*, 398.
- (16) *Op.cit.*, 399.
- (17) *Tractatus logico-philosophicus*, Wittgenstein Schriften, Bd.1, S. 78.
- (18) Gardner, 前掲書 p. 104.
- (19) Vgl. Husserl, *Husserliana IV*, 145, 161; Claesges, *op. cit.* S.95-96.
- (20) *Husserliana IV*, S. 56-57.
- (21) Heidegger, *Sein und Zeit*, S.109.
- (22) Kant, *K. d. r. V*, A.19.
- (23) Husserl, *Husserliana*, Hua. I, S.146.
- (24) Husserl, *Husserliana I*, S. 145 ff.
- (25) Husserl, *Husserliana I*, S. 128.
- (26) A.a.O.
- (27) Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, S.72.
- (28) Gardner, 前掲書 p. 331.
- (29) “ニコフスキー”『生きられる空間』第二巻、邦訳、274-5.